

それではマタイの福音書 27 章 45～54 節をお開き頂いて、そちらをまず初めに一度通してお読みいたします。『⁴⁵さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。⁴⁶ 三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」という意味である。⁴⁷すると、それを聞いて、そこに立っていた人々のうち、ある人たちは、「この人はエリヤを呼んでいる。」と言った。⁴⁸また、彼らのひとりがすぐ走って行って、海綿を取り、それに酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。⁴⁹ほかの者たちは、「私たちはエリヤが助けに来るかどうか見ることとしよう。」と言った。⁵⁰ そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。⁵¹ すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。⁵² また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った。⁵³ そして、イエスの復活の後に墓から出て来て、聖都には行って多くの人に現われた。(聖都とはエルサレムのことです。)⁵⁴ 百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「この方はまことに神の子であった。」と言った。』ここにイエス・キリストの十字架刑の姿、そしてイエスが十字架上で語られた言葉や、その様子が記されてあったわけですがけれども、特にイエスが十字架上で叫ばれた言葉の中で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」**46 節**に記録されているこの言葉は、多くの人に誤解されております。イエスは確かに聖人のような素晴らしい宗教家であったかもしれない。でもやっぱり所詮は人間であると。死ぬ間際になったらやっぱり死が怖くて、やっぱり恐れて絶望的になってこのように叫ばざるを得なかったに違いないと。ここにイエスの弱さを見る人もおります。やっぱり死を前にして人は無力であって、そして恐怖におののいて、いくら高尚な事を教えたとしても死の前には結局は誰もがうろたえてしまう。そのように誤解している人たちがおります。しかしこの「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」意味は「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」この叫びは実は旧約聖書の中の**詩篇 22 篇 1 節**の引用をイエスが為さったのです。ただの断末魔ではないのです。恐怖から出た叫びではないのです。これはむしろ**詩篇 22 篇 1 節**をイエスが高らかに引用し、むしろこの**詩篇 22 篇**というのはダビデの賛歌という表題がついていますので、実際のところこれは讚美歌なんです。讚美歌の 1 番の 1 節を十字架の上でイエスは苦しみに遭いながらも実は叫ばれたというよりも、むしろ歌われたと言った方が正しいのかもしれませんが。**詩篇 22 篇 1 節**というのは、表題には『指揮者のために「暁の女鹿」の調べに合わせて。ダビデの賛歌。』とあります。ダビデ王が作った言わば讚美歌と言って良いと思います。その 1 節のところに『わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。』原語はヘブル語で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」であります。イエスはまさに**詩篇 22 篇 1 節**を引用されたわけです。ユダヤ人の慣習ですと、イエスもユダヤ人ですがけれども、ユダヤ人の言葉がヘブル語と言うんですが、そのユダヤ人の慣習によりますと詩篇の最初の節を引用した場合は、それはその詩全体を引用したことになるという、ここでは長い内容になっていますが、**1 節**だけ引用すれば今イエスはこの**詩篇 22 篇**を今心の中でも暗誦されて、そして人々に「今自分の身に起こっていること、十字架刑にされていることは、実はこの**詩篇 22 篇**の事柄なんだ。」と。「ここに歌われている内容が今まさに現実として人々の前で起こっているんだ。」ということをイエスは十字架の上で人々に現わされたわけです。**2 節**を見て頂くと『わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。』実際にイエスはこの言葉をまさに昼、文字通り正午 12 時に叫ばれました。マタイ 27 章のところで読んだばかりであります。**45 節**のところに『十二時から』とあります。3 時までちょうど昼間が真っ暗闇になったわけです。ちょうどその昼の時間帯に『わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。』とイエスは叫ばれました。文字通り**詩篇 22 篇**がイエスの身に起こっているわけです。実はイエス・キリストが神のことを“神”と呼んだのは、ここが初めてです。ちょっとおかしく聞こえるかもしれませんが、イエスは普段はこの“神”のことを、“父”と呼んでおりました。“わが父”と呼んでいたわけです。私のお父さん、といつも神を呼ぶ時には、そのように呼びかけていたんですけれども、その生涯において初めてイエスは、“父”ではなく

で“神”と叫ばれました。どうして普段は「父よ」「わが父よ」と呼んでいたのに、十字架上で初めて「わが神」と言い直したのでしょうか。勿論この詩篇を引用したというふうにも言えるんですけども、実はこの瞬間父なる神とイエス・キリストすなわち神の御子、子なる神との関係に劇的な変化が生じたわけです。その変化とは、罪のないイエス・キリストが十字架の上で私たちのすべての罪を負われたその瞬間が、父との関係を変えてしまったわけです。

参考までにこれは私の方でお読みしますので聞いて頂ければと思います。開ける方は**ハバクク 1章 13節**というところになります。『あなたの目は(神に向かって言っています。)あまりきよくて、悪を見ず、労苦に目を留めることができないでしょう。』きよい神様は罪を見ることは出来ません。きよい神が罪を見れば、罪はすべて滅せられてしまいます。きよい神の前に罪人はとても立ち得ません。一瞬にして滅ぼし尽くされてしまいます。それはまさに太陽の前に立つようなものです。あまりにもきよいので、ちょっとでも罪があるならば、ちょっとでも欠けがあるならば、このきよい義なる完璧な神の前に誰も立ち得ないわけです。ですから、あなたの目はあまりきよくて、悪を見ることがないわけです。見る事がむしろ出来ないと云った方が良いと思います。イエス・キリストは勿論罪の無い方ですから、神と父と子の美しい関係を常に保ってきたわけですけども、しかし、そのイエスが私たちの罪を十字架の上で負われた瞬間、イエスは罪とされました。これについては新約聖書の**第二コリント 5章 21節**に書かれております。とても有名な聖句ですけども、これも聞いて頂ければと思います。『**神は、罪を知らない方を(すなわちイエス・キリストを)、私たちの代わりに罪とされました。**(イエスは私たちの代わりに罪を負って、罪そのものとなったわけです。その上で十字架に磔^{はりつけ}にされたわけです。)それは、私たちが、この方^{あがな}にあつて(イエス・キリストにあつて)、神の義となるためです。』イエス・キリストが、私たちが負いきれないすべての罪を十字架の上で肩代わりして下さったので、私たちのすべての罪は贖^{あがな}われ、罪の借金はすべてイエスによって払って頂き、そして私たちのすべての罪は帳消しにされ、すべての罪は赦されたわけです。それが神の義とされるということです。罰せられるべきは私たちだったんですが、それは永遠の滅び、永遠の死、神と永遠に引き離される所謂地獄を意味していたわけです。でも神は私たちのことを愛して止みません。1人でも多くの人が滅びることなく、永遠の命を持つことが神の御心でありました。ですからそのために神はひとり子イエス・キリストを救い主として私たちに送って下さったわけです。私たちは自分の罪を自分ではどうにも出来ません。自分自身を救うことが出来ません。誰も死に打ち勝つことも出来ないんです。死んだあと天国に自力で行くことは、誰も出来ません。でもイエスが、私たちに出来ないことを代わりにして下さいました。それが十字架であります。十字架という天国への架け橋と言って良いと思います。ですからイエスが十字架の上で罪を負われたので、父なる神はもはやイエスをそれまでと同じようには見る事が出来なくなりました。聖い神はあまりにも聖いので、罪を見る事が出来ないわけです。イエスを今まで愛の眼差しで見っていたその目は、もう見るに堪えないと。父はイエスからこの瞬間背を向けたわけです。ですからイエスはもはや父とは呼べずに、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」勿論イエスはその意味を、その理由を、その目的を知っていました。知っていて死ぬためにイエスはこの世に来て、クリスマスに生まれて下さったわけです。死ぬために来た方は、意味が分かっていたのですが、敢えてイエスは**詩篇 22篇 1節**を引用して、私たちにそのことを分からせるためにも敢えて「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」本来は罪人の私たちが叫ばなくてはいけない叫びであったわけです。私たちは罪人ですから、神と、父と子のような親しい水入らずの関係はとても持てない者だったわけですが、完全にこの神から見捨てられて然るべき存在でありましたけれども、しかしイエスは私たちの代わりに罪とされ、私たちが義とするために最期の最期まで、最期の一息まで十字架の上でその贖いの仕事を果たして下さいました。

もう一度**詩篇 22篇**の方に目を戻して頂きたいと思います。先ほどは**1~2節**を読んだわけですが、**6節**のところも見て下さい。『しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそりり、民のさげすみです。』これを最初に書いたのは勿論ダビデ王ですけども、ダビデ王はこのことを神様からの啓示として預言の詩篇として受けたわけです。この**詩篇 22篇**は実はイエス・キリストが将来(将来というのはこの時代からすると約1000年後)にこの世に連れて、そして何をなさるのか。そのことをあらかじめ神はダビデの詩を通して預言として私たちにも与えて下さって

たわけです。ですからこのような詩篇のことを、『メシヤ詩篇』と言います。“メシヤ”というのはキリストのことです。救い主のことを歌い上げている詩篇であります。イエスがこの世に来られる 1000 年も前の歌であります。その中で「私は虫けらです。」というのは、これはイエスがそのように言われていると見て欲しいと思います。虫けらです。この“虫けら”という言葉はやはり原語でヘブル語で「トラ」「トレアー」と言います。この「トラ」「トレアー」という言葉は、厳密には「^{えんじ}臙脂」という意味です。えんじ色のえんじです。または緋色、スカーレットという色であります。この緋色、えんじ色、スカーレットという色を「えんじ虫」という虫を潰して、その虫の抽出液というものを染料として使うわけです。染料に使うわけです。ですから本来はこれは「えんじ虫」という虫のことです。そしてそれを潰して、殺して、その体液をえんじ色に使うわけです。興味深いことにこの「えんじ虫」という虫、「トラ」「トレアー」という虫は、産卵する時には木にしがみついで自分の体を破裂させるようにして自らの命と引き換えに新しい生命を生み出すと言われています。文字通り自分の命をこの母親の虫は子供に与えるわけです。自分が死ぬことによって初めて新しい命が誕生するわけです。そしてその際には緋色の体液が体からほとばしり出ます。そしてその体液はしがみついた木に染みつくわけです。その染みついた緋色の赤い血の色の跡は時間が経つとだんだん変色して白く雪のようにフレーク状になると言われています。それが剥がれ落ちてひらひらとまるで雪のように地に落ちるそうです。非常に興味深い虫であります。イエスは「私は虫けらです。」えんじ虫です。私は今から木にしがみついで自らの身体を文字通り破裂させ、その流す血がすべての罪を雪よりも白く変えるのだと。聖めるのだと。そのように今ご自分の身に起こっていることをイエスが詩篇 22 篇を引用することによって、そこに集まった人たちにグラフィカルに、絵画的に、見て分かるように証しされているわけです。イエスは虫けらのように扱われました。自ら進んで新しい命を生み出すために木に磔になって、そしてイエスの脇腹から、槍で刺されたあとに血と水が分かれ出るわけです。血と水が分かれ出る、母親ならば連想出来ると思います。赤ちゃんを産む時、血と水が分かれ出るわけです。まさに出産のシーンと言って良いと思います。イエスはよく「最後のアダム」などとも呼ばれます。最初のアダムは皆さんも知っているように、その脇腹から花嫁のエバが造られました。最後のアダムの脇腹からは、キリストの花嫁である私たち教会が造られるわけです。

そして、また詩編 22 篇 7 節に目を移して頂きたいと思えます。『私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。』実はこの聖句は、マタイ 27 章 39 節のところに引用されているんです。ですから後で確認してみてください。今朝のテキストはマタイ 27 章 45～54 節を取り上げたんですが、その前のマタイ 27 章 39 節のところにこの詩編 22 篇 7 節がまさに引用されているわけです。このことがまさにイエスの十字架刑の 1 連の出来事の中で成就しているんだ。この 1000 年前に書かれたメシヤ預言は、果たして今ここでイエスの十字架刑において成就しているんだというところを見ることが出来ます。

同じく詩篇 22 篇 8 節もまたマタイの福音書 27 章 43 節のところで実現しています。これも後で読み比べて確認して頂ければと思います。『「主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」』詩篇 22 篇は一つ一つ正確にイエスの十字架刑において成就しているわけです。

そして少し飛ばしますけれども、詩篇 22 篇 16 節のところに『犬どもが私を取り巻き、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。』「私の手足を引き裂いた」という部分は、英語の欽定訳聖書 King James version という最も権威のある英語の聖書があるんですが、その訳ですとこの部分は“pierced”という言葉が使われています。「ピアス」という言葉を日本語でも使いますが、この“pierced”というは過去形になっていて「突き刺した」という意味であります。「手足を突き刺した」「手足を刺し通した」と英語の欽定訳聖書は訳出しております。まさにイエス・キリストの手足は突き刺されたわけです。刺し通されたわけです。荒削りの木に釘付けにされたわけです。

他にも皆さんのよくご存知なメシヤ預言の箇所、イザヤ 53 章。詩篇 22 篇に並んでイザヤ 53 章もイエス・キリストの受ける苦しみ、受難をあらかじめ預言した箇所として有名であります。そのイザヤ 53 章 5 節のところにもこう書いてあります。『しかし、彼は（彼というのはイエス・キリストのことです。この預言はイエス・キリストがこの世に来られる 750 年も前に預言者イザヤによって語られた預言です。実に正確です。）、私たちのそむきの罪のために刺し通さ

れ、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。』とあります。この部分のはちにキリストの弟子の筆頭ペテロによって引用されています。第一ペテロ 2:24 ということ、これは皆さんにお配りしている週報にも引用した箇所でもあります。『そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。』キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。イザヤ 53 章 5 節をペテロが引用しております。ですから今詩篇 22 篇の中から実際にイエス・キリストが十字架刑によってどんな痛みを受けられたのか。その一つ一つを預言という形で今私たちは見ているわけですが、もう一度詩篇 22 篇の具体的に十字架刑でイエスはどのような痛みを味わわれたのか。この詩篇 22 篇の中に書かれていることが 1000 年後のナザレのイエスの十字架刑のうちにすべて成就していることを確認して頂きたいと思えます。22 篇 14~15 節のところ。『¹⁴私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。¹⁵ 私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついてあります。』これも実際に十字架刑にされた者が味わうところの激痛であります。イエスはこの十字架刑にされる前に既に様々な受難というものを通してあります。これについては皆さんのお手元の週報に一つ一つ時系列でまとめたものをお配りしていますので後で見たいと思えます。十字架刑も恐ろしい痛みを人に与えるものですが、でもその前からイエスは様々な痛み、もう死に直結するような痛みを幾度も通っております。例えば十字架刑の前夜、イエスはゲッセマネの園というところで徹夜の祈りをなさいました。その際にはあまりのストレスで血汗症という命に関わる症状を患いました。『わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。』と。この杯というのは勿論十字架刑のことです。死ぬことが怖かったのではありません。先ほども説明したように、罪を負うことによって父なる神との関係が一瞬ではありますけれども断絶されてしまうわけです。永遠に絶対に途切れることのなかった三位一体の神の関係が、罪をイエスが負われることによって絶たれてしまうわけです。それは耐え難いものです。神と一瞬でも引き離されること、これはまさに地獄の痛みだったわけです。死ぬためにこの世に連れて、イエスは死が怖かったのではありません。むしろ永遠の死が怖かったわけです。神と引き離されること。真っ暗闇のそのどん底に突き落とされるようなものです。その痛みをイエスは恐れて、3 度も同じ祈りを捧げ、それがあまりにも恐ろしいストレスを、プレッシャーをイエスに与えたので、毛細血管が破裂して、そして汗を出す汗腺から血が吹き出したわけです。それが、イエスが血を流しながら、血の汗を流しながら祈られたという、血汗症という症状です。これは第二次世界大戦の時にも記録された症状で、多くの場合はこの血汗症が現われた場合、大抵は人は死ぬと言われています。それ以外にも精神的な苦痛もイエスは味わわれました。友と呼ぶ者たちから、信頼する弟子たちから裏切られたわけです。ユダにもペテロにも。

そして世界最強の軍隊であるローマ兵たちからよってたかって殴られるというリンチを受けました。ボクサーに殴られるようなものです。プロの格闘家にボコボコにされるような目に遭ったわけです。勿論他にも群衆たちからは嘲られ、唾をかけられました。最大の侮辱を受けたわけです。そしてフラグラムと呼ばれる特殊なローマの鞭をもってイエスは殺されかけました。これも皆さんの週報に詳しく記されています。鞭の先は幾重にも分かれていて、その先端にはガラスや金属、そして動物の骨の鋭い破片といったものが仕込まれています。それで何度も何度も叩かれるわけです。抵抗出来ない状態で。その尖ったものは皮膚に勿論食い込みます。食い込んで鞭を引けば、当然皮膚を剥がすわけです。それで何度も何度も打たれているうちに、皮膚はもはや跡形もなく無くなり、イエスの背中では完全に筋肉むき出し、骨むき出し。既^{すんで}の所で内蔵が飛び出ない、そういう状態です。血まみれです。見るに耐えない状態です。この中にも皆さんの中に『パッション』という映画を見られた方もいるかと思えます。メル・ギブソンの作った『パッション』、原題は”Passion of the Christ.”キリストのパッション。パッションとは、受難を意味する言葉です。ここでも凄惨なシーンが、極力イエスの十字架刑を再現するために目を背けたくくなるような血まみれのシーンがその映画の中にも取められているんですが、それはまだ綺麗な方でありませぬ。そんなものではありません。もう人間とは思えないほどにイエスの顔は腫れ上がり、そしてイエスの肉体はもう血まみれの状態です。生きているのが不思議

です。文献によればこのフラグラムの鞭打ちによって十字架刑の前に死んでしまうということも多々起こったと言われています。でもイエスはそこでは死ねなかったのです。イエスは十字架刑によって死ななければならないことを知っておりました。**詩篇 22 篇**を知っていたんです。手足を突き刺されて、刺し通されて死ぬことが、救い主としての責務であると。私たちの罪を十字架の上で負って死なれることが、メシヤとして、キリストとしての道であると。もう苦しいからこの辺で死んでおこう、ということも出来たと思いますし、勿論イエスは神の子ですから、それらすべてを避けてさっさと天国に帰ることも出来たわけです。「十字架から降りてみる。」と言われれば、いくらでも降りることが出来ました。でも何がイエスを十字架に留めたのか。それは私たちを愛する愛であります。釘がイエスを十字架の上に留めたのではありません。もしイエスが十字架から降りてしまえば、私たちは永遠に滅びてしまう。今こうしてられません。もう地獄に落ちるしかない、生きていても仕方がない。死んだら確実に神から引き離され、もう救われる余地がなくなる。そんな永遠の苦しみを負わなければいけない状態になっていたわけです。でもイエスは十字架から降りませんでした。それは私たちが神を父と呼べて、そして天においては永遠にこの神と水入らずに豊かな親密な愛の関係を持つために、永遠の命を持つために、イエスは敢えて十字架に留まりました。そして十字架の上で苦しみ、死んで下さいました。ご自身には罪は 1 つもなかったわけです。しかし私たちがどうにも出来ない罪をイエスが代わりに十字架で負って死んで下さいました。すべての苦しみ、一つ一つあなたのために負われたんです。肉体の苦しみだけではありません。愛する者たちから背を向けられる、父親から背を向けられる、信頼する友から背を向けられる、裏切られる、否定される。人々から公衆の面前で侮辱される、嘲られる、馬鹿にされる、唾をかけられる。そして十字架上では、一糸まとわぬ姿で、真っ裸で晒されるんです。所謂聖画というものをイメージしてはいけません。映画のイエスを今想像してはいけません。実際のイエスは真っ裸です。あなたのために真っ裸になって、ボロボロの姿で血まみれです。とても凝視出来ません。血まみれになった肉の塊が十字架の上に磔にされているんです。それが、イエスが私たちのために受けて下さったことであり、その姿こそ本来の私たちの姿です。私たちがそのようにならなくてはならなかったわけです。それが、罪がもたらす恐ろしさであります。後でこの罪についても少し触れたいと思いますけれども、私たちは気軽に罪を犯すものです。「だって人間だから仕方ないじゃない。」確かにそうも言えます。私たちは誰 1 人完璧ではありません。聖書にも『**義人はいない。ひとりもない。**』と。『**すべての人は、罪を犯したので、神の栄誉を受けることはできない。**』と聖書にハッキリ書いてあります。でもこの罪がもたらす恐ろしさを覚えて欲しいと思います。『**罪から来る報酬は、死です。**』と、ローマ 6:23 に書いてあります。罪がもたらす結果は、死であります。イエスの十字架の死を見れば明らかです。罪がイエスをあのような無残な姿に変えてしまうんです。罪のない者を、あんなひどい目に遭わせる。これが罪であります。罪というのは、禁じられているから悪いのではありません。罪は、悪いから禁じられているのです。「キリスト教なんて、堅苦しいです。あれをしてはいけない、これをしてはいけないと、いろいろルールがあつて。だから私はキリスト教なんか入りたくないんです。」とか、そういう言い方をよく人はしますけれども、そうではないんです。罪は禁じているから悪いのではなくて、罪そのものが悪いからこそ禁じられているわけです。どうしてあれはいけないのか、これはいけないのか。それが罪なのか。それは罪がもたらす弊害というもの。罪があなたにどれほどの害を、ダメージをもたらすのか。そしてあなただけではなくて、あなたの周囲の愛する者たちも罪は巻き込んでしまいます。罪の影響というものは、計り知れません。それがあまりにもひどいので、あまりにも残酷なので、神様はそれを罪だと。それを犯してはならないと、禁じてくれているわけです。禁じられて初めて私たちは気付くわけです。ですから誤解してはいけません。神様は、私たちただ縛り上げたいのではないのです。私たちをルールで縛り上げて、つまらない人生を送らせたいと神は願っているのではありません。むしろこの罪の恐怖から、死の恐怖から私たちを解放するために、私たちに神のルールブックが、聖書という言葉が与えられているわけです。私たちを守るため。罪がもたらすこの死から私たちを解放するためです。免れさせるためであります。

そしてもう一度**詩篇 22 篇**の先ほど読んだ**14~15 節**のところを見て欲しいと思います。これが実際に十字架の上で受刑者が味わう具体的な肉体的な苦痛の描写であります。『¹⁴ 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。¹⁵ 私の力は、土器のかげらのように、かわききり、

私の舌は、上あごにくっついていて、あなたは私を死のちりの上に置かれます。』十字架の上に磔にされた受刑者は、両腕を左右に広げた状態で仰向けに寝かされます。その上で取り外しが可能な十字架の横棒、それに両腕があてがわれるわけです。ちょうど両腕の手首のところ、手首の橈骨(とうこつ)と尺骨(しゃっこつ)と手のひらの付け根の手根骨(しゅこんこつ)、その間に25～30センチもの巨大な釘が、杭のような釘が打ち込まれるわけです。手のひらではありません。よく絵であったり映画であると、手のひらに釘が打ち込まれますけれども、手のひらですと手のひらには脂があります。脂肪によって滑るわけです。そして体重がかかると手のひらは簡単に裂かれてしまうわけです。ですから手のひらに釘が打ち込まれることは、まずありませんでした。全体重が釘付けにされたところにかかってくるわけですから、手なんて脂でいっぱいですし柔らかいですから、簡単に裂けてしまうわけです。体が落ちてしまうわけです。ですから通常は手首に釘が打ち込まれました。これは考古学の発見でも明らかとなっています。手首に釘が刺さったままの白骨が見つかっております。そして受刑者は完全に身動き取れない状態になります。実際にこの手首のところに釘を打ち込まれますと、上腕から手に下りてくる神経の中で1番大きな正中神経というものを完全に破壊することになります。その時には物凄い激痛です。神経が潰されるわけです。神経の束が一瞬にして断ち切られるわけです。焼け付くような激痛が走ると言われています。そして神経が壊れるわけですから、完全に腕の機能を失います。もう一度そこを打たれたら、もう腕は二度と動かなくなるわけです。死ぬまで固定されたままです。もう既にその時点で致命傷となります。ただこの方法は、出血が最小限に留められて、さらに1本の骨も折られずに済むという点で、実はまさに聖書的なスポット・箇所と言えます。と言いますのは、詩篇22篇17節のところに『私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。』と。骨は砕かれていないので数えることが出来ると。そして詩篇34篇20節にもイエス・キリストの骨のことが書いてあるんですが『主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。』と。これもメシヤ詩篇なんです。そしてこのことがイエスの十字架刑において成就したということはヨハネの福音書19章33節において説明されています。『しかし、イエスのところに来ると、イエスがすでに死んでおられるのを認めたので、そのすねを折らなかつた。』と。本来は後でも説明しますが、十字架刑にされると大抵は脛が折られて死が早められていくわけですが、イエスの場合は通常の手続きを経ずに、もう脛を折るまでもなく既に絶命したということが確認されたわけです。実はイエスが十字架刑にされた日は、『過ぎ越しのお祭り』という日でした。その時には過ぎ越しの小羊が屠られるわけです。生贄として羊が捧げられるのですが、その際に羊の骨は一切折られてはならないという規定が、旧約聖書にあります。出エジプト記12章に書いてあるんですけれども、そのまさに過ぎ越しの日にイエスは、過ぎ越しの小羊となられて、その骨は1つも折られることがなくすべての罪を負われたわけです。そのことが今ここで成就しているわけです。手首に釘を打ちつけられるその一つ一つの行為をもっても骨が砕かれなかつた。正確に聖書の預言が成就しているわけです。

さらにこの十字架の磔という処刑方法において受刑者の足の位置が最も重要な事柄になってきます。膝は約45度に曲げられます。さらに足首も脛からさらに45度の角度になります。頭の中で想像していただきたいのですけれども、まっすぐ足を伸ばしているのではないのです。膝も45度に曲げて、足首も45度に曲げています。十字架の縦の棒に対しては、足も膝も全部平行になる形になります。そういう格好にさせられます。非常に苦しい状態に固定されるわけです。そしてやはり25～30センチの太い釘をその足首の重ねたところに一度に打ちつけられるわけです。足の甲の側から、足の第2、第3指の骨に刺して、そして足の裏を通過して縦棒に釘付けにされます。この場合は、足の裏に位置する主要な血管を傷めることになって大量の出血がありますけれども、それでもそれは致命傷にはなりません。一応受刑者はその格好で身動き取れない状態に固定されるわけです。徐々に徐々に痛みを味わいながらゆっくり死なせるという、人類史上最もおぞましい処刑方が十字架刑であります。即死はさせない。最大限の苦痛を与えてじわじわと殺すと。中には1週間ほど生き延びたという記録もあります。晒し者になった状態で、死ねないわけです。激痛と共に最後の最後まで苦しみ続けるわけです。惨めに死んでいくわけです。非常に窮屈な格好をしていますから、吊るされた状態です。全部の体重がその両手両足にかかってくるわけです。皆さんもそういう格好を1度家で試してみてください。多分5分ともたないと思います。そしてその状態で腿の筋力が低下すればするほど、今度

は体重が神経の損傷によって麻痺している腕と肩にかかってきます。その結果十字架刑からもう数分後に肩が関節から外れていきます。さらにその後数分後には肘の関節も、手首の関節も外れていきます。この中にも関節を外したことがある方がいると思います。脱臼する痛み。痛いですね。3つの関節が外れるわけです。その結果受刑者の腕は少し伸びるそうです。20～30センチも腕がだらんと伸びるそうです。その格好は、あたかもこれでもか言わんがばかりにイエス・キリストが両手を引き伸ばして、私たちに「私の懐にやって来なさい。私はあなたがたをこれほどまでに愛しているよ。」と。神はあなたのことをどれほど愛しているのか。まさにジェスチャーで表してくれたわけです。両手を伸ばして「これぐらいだ。」と言ったわけです。「十字架にかかるほどにあなたを愛している。」これがイエスのメッセージです。身をもってそのメッセージを示して下さったわけです。そしてこの両腕の関節が外れますと、今度は大部分の体重が胸にかかってきます。胸部にかかってきます。これによって肋骨が伸びきって、そして常に息を吸った状態に吊り上がってしまう。想像してみてください。息を大きく吸って、止めたような状態。苦しいですね。ですから息を吐くためには、足を踏ん張って、そして体を押し上げることによって肋骨の引き吊りを戻さなくてはけません。一生懸命膝で何とか動いて、呼吸を維持するわけです。腕は動きませんので足だけです。でも時間の経過と共に、だんだん腿の筋肉、足首の力が衰えていくわけです。長い間体を押し上げる事は難しくなっていく。ですから処刑の時間が経つにつれて、その受刑者の体を持ち上げる時間が勿論なくなってくるわけですから、呼吸困難に陥ります。両腕への関節の負担もさらに酷くなって、いっそう胸が引きつって、あとは呼吸出来なくなるまで物凄い苦しい思いをするはめになります。そして、その間受刑者に必要な肺の運動が出来ない体勢にありますので、血中酸素濃度というものが低下していきます。血中二酸化炭素が今度は上昇します。これに対して体の呼吸器と循環器を最大活用して、低下している血中酸素濃度を補給し、そして二酸化炭素を排除しようとする。そういう動きを心臓が補償しようとする。普段以上に心臓がそのために過酷に動くわけです。活発にならざるを得なくなります。ですから心臓が酷使されるわけです。このことも皆さんの週報には詳しく書いてあります。呼吸も激しくなるわけですが、心臓がそれに増加わって激しく酷使されるわけです。だんだん心臓自体も弱っていくわけです。肺の機能も停止し、そして心臓の機能も衰えてきます。停止するようになります。それに加えて出血もありますから、当然激しい脱水症状もあります。酸素が供給されないの、もう完全に虫の息になっていくわけです。イエスの場合は心臓の極度の疲労によって心臓が破裂したと思われます。そのことが、後にイエスが実際に死んだかどうか確認するために死刑執行人のローマ兵たちが脇腹に槍を突き刺したわけです。その時に水と血が分かれ出たのですけれども、それは医学的には心臓破裂をどうもイエスは死因としていたのだということが判明したわけです。水と血が分かれ出る。これも象徴的な意味を先ほど触れましたけれども、普通であれば十字架刑は窒息死です。死を早めるために脛の骨を折って、もはや体を持ち上げられない状態にして死を早めるわけですが、イエスの場合はその前に息絶えましたので、とりあえず死を確認するために脇腹に槍を刺したわけです。その結果、完全にイエスは死に絶えていたということで、十字架の上からその遺体が引き下ろされるわけです。それが、イエスが味わわれた医学的な見地から、解剖学的な見地から見た具体的な十字架刑の苦しみでありました。そのことが、イエスが十字架刑にされる1000年も前に既に**詩篇 22 篇**に記録されていたわけです。ただ、そのイエスが来られる1000年前の時代、ダビデがこの詩を書いた時代というのは、まだ当時十字架刑というものは人類には考案されていませんでした。紹介されていなかったわけです。十字架刑というものは、イエスが来られる4～6世紀も前の時代ですけれども。BC1000年代、1000年も前には、まだ十字架刑は考案されていませんでした。それからまだ400年余経ってから、ペルシャの方から十字架刑というものが伝わって、ギリシャのアレクサンドロス大王によってギリシャ世界に広まって、そしてそれがBC200年頃にイエスの時代であるローマ帝国に導入されたわけです。ですから**詩篇 22 篇**が書かれた時点では、十字架刑なんていうものはまだ人類は知りもしなかったわけです。でもそれが既に預言されていたわけです。しかもイエスはユダヤ人でしたから、本来ユダヤ人の処刑方というのは十字架刑ではなく、石打刑でありました。でも当時はローマ帝国に支配されていたので、ユダヤの律法に基づいて処刑を行う事は許されていませんでした。ですから普通であればユダヤ人は十字架刑にはされなかったわけです。石か何かで打たれて死ぬということ

が一般的であったわけですが、しかしイエスはローマ帝国によって十字架刑の死をもって、すべての聖書預言を成就されたわけですが、すべてこれは神様のご計画通りでありました。とても人間がこのタイミングを合わせて、旧約聖書に書かれている一つ一つの預言、今取り上げているのはほんの数例であります。イエス・キリストに関する預言というのは、数百あります。300とも、350とも言われています。イエスが今から2000年前にこの世にいられて、そして十字架の死をもって死なれ、そして3日目によみがえるといった内容は、既に旧約聖書の中に預言されているんですけれども、そのすべてをイエスは成就されました。とても人間業ではありません。とても偶然とは言えません。

また、テキストの**マタイ 27 章**の方に戻って頂きたいのですけれども、**51 節**のところを見て下さい。**マタイ 27:51**。イエスの死の直後です。『すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。そして、地が揺れ動き（地震が起こり）、岩が裂けた。（地殻変動が起こったということです。）』もうこの前から、正午から3時まで、一番明るい時間帯に太陽は光を失って真っ暗闇になっていました。天変地異がもう既に起こっていたわけですが、ただごとではないという出来事が、もうあったわけですが、さらに増加わって、ここには絶対にあり得ないようなことが起こっています。神殿というのはエルサレム神殿のことですが、そこにある幕というのは、聖所とも言います。その聖所の中で最も神聖な場所（至聖所と呼ばれるところ）と聖所の間には、幕があったんです。垂れ幕とも言います。この垂れ幕が裂けた、とあります。上から下まで真二つ。これは人間業ではありません。なぜならば垂れ幕というのは、高さが当時18メートルあったと言われています。18メートル以上です。幅はやはり9メートル以上。そして厚みは25センチ以上あったと言われています。そしてその重さは、祭司が300人がかりで運んだという記録が残っています。ですから想像してみてください。そんな巨大な幕が、普通は裂けるはずがありません。垂れ下がっているわけですから、もし人間が裂くとするならば、下から上へと裂くわけですが、これは上から下まで真二つです。そして、「その垂れ幕は何故そもそもそこにあるのですか。」と思われると思うのですけれども、その至聖所というところには人の入室が禁じられているほど聖なる空間として、聖域とされていた場所でありました。ですから垂れ幕で仕切られていたわけですが、ただし、その垂れ幕の中には1年に1回だけ特別な人が入室することが許されていました。その特別な人というのは大祭司という人で、大祭司は贖罪の日という1年に1回のお祭りの日にだけ生贄の血を携えて入ることが許されていました。その垂れ幕の向こうには、聖なる神様の臨在が満ちていました。その象徴物として、神の箱（契約の箱）というものが置いてありました。その箱の中には、モーセの十戒のあの石の板2枚、そしてアロンの杖といったものや、マナが入った壺といったものが収められていて、それらは全て聖なる神様を表すアイテムでありました。大祭司しか、たった1人しか、しかもいつでも入れたわけではありません。1年に1回だけです。生贄の血を携えなければ入れません。ちょっとでもミスをすれば、その至聖所の中で大祭司とは言えども即死します。聖なる神の前では誰も立ち得ないのです。でも大祭司は神が定められた手順に従って事を行うと、イスラエル全体の罪がその日をもって贖われる。それが贖罪の日の記念すべきハイライトであるわけですが、生きて至聖所の中から大祭司が出て来ますと、イスラエルのすべての人の罪が贖われたということが確認され、大歓声が上がります。それまでは人々は食べ物を食べずに断食しているわけですが、でも大祭司が生きて帰って来た時には、罪が全部処理された。神によってこの生贄が、罪の犠牲が受け入れられて、そして罪が赦されたということを確認して大喜びするわけですが、その垂れ幕が、イエスの死と共に真二つに裂けて、これまで仕切りとなっていたものが、隔たりとなっていたものがなくなったわけですが、オープンハウスの状態になったわけですが、まさにイエス・キリストが生贄となってすべての罪を負って死んで下さったので、もはや垂れ幕は必要なくなったわけですが、そしてイエスこそがこの垂れ幕であると。これについては**ヘブル人への手紙の 10 章**というところに書いてありますから、後で**10 章**全体を読んでみてください。イエス・キリストこそがこの垂れ幕。垂れ幕はイエスの体を象徴しているんだと、そこでは教えられています。イエスの体が裂かれたように、垂れ幕もイエスの体の象徴として裂かれました。罪を負って下さったイエスが裂かれ、過ぎ越しの小羊のようにも屠られたのですが、垂れ幕としても裂かれたわけですが、裂かれて得られたものは、神とのアクセスです。神様とはもう自由に行き来できるんだと。これまでは罪があったので、誰もが神とは自由に交わりを持つ事が出来なかったわけですが、アクセスが許されたのは、大祭司だけ、1年に1回だけです。でもイエスを信じる者は、自分の罪はすべてイエ

スが十字架で負ってくださったと信じる者は、この神といつでも、どこでも、エルサレムに行かなくても、世界のどこでもアクセスを持つことができる。お話ができるわけです。自由に交わりが持てるわけです。

神と私たちを隔てていたのは罪というものでありました。イザヤ 59 章というところを開いて頂きたいのですが、1 節に『¹ 見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。² あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。』罪がこの聖なる神とのアクセスを阻んでいたわけです。この仕切りが、隔ての壁となっていたわけです。自由に行き来が出来なかったわけです。それでも神の憐れみによって 1 年に 1 回だけ代表者の大祭司が生贄の血を携えて入れれば、それが良かったわけです。それによってすべての罪が贖われるということが神様によって定められたわけです。その際には生贄の血を契約の箱、神の箱と呼ばれるものの蓋の上に 7 度振りかけたと言われています。その蓋は贖いの蓋、贖罪蓋とも呼ばれていまして、そこに血を振りかけて罪をすべて贖うという定めを神様はなさいました。これが、神が私たちの罪を赦す方法として古代イスラエル人に与えられたものであったわけです。罪はシリアスなものです。罪から来る報酬は死だ、と言いました。人の罪を赦すのに、贖うのには、命が代償として求められます。血を流すことなしに罪の赦しはないと、レビ記 17 章にも記録されています。ですから罪を贖うためにイエスは命を捨てて血を流して下さったわけです。罪から来る報酬は死ですから、死を免れるためには命が必要なわけです。その命は罪のない命でなければ何にもなりません。罪のない命は、イエス・キリストだけがお持ちです。すべての人は罪人です。ここにいる全員例外なく罪人であります。ですからイエス・キリストだけが私たちの罪を唯一贖うことの出来る救い主、人となられた神です。その方が十字架に掛かって、すべての罪の贖いの処理を下されたわけです。その結果、神殿の垂れ幕というものが、仕切りとなっていたものがもはや不要となったわけです。もう罪がすべて贖われたので、もうオープンハウスになったわけです。いつでも自由にイエス・キリストを信じる者は、この神と対面できるわけです。神の恵みの御座に大胆に近づくことが許されたわけです。素晴らしい恵み、特権が与えられました。

そしてもう 1 つ指摘しておきたい事は、大祭司は生贄の血を 7 度契約の箱の蓋の贖罪蓋に振りかけると言いましたが、イエスの体にも 7 箇所^{いばら}の傷がつけられました。頭から見て欲しいと思います。頭の上には茨の冠。茨の棘は 5 センチはありました。その冠をかぶせられて、嘲^{あざけ}られて「ユダヤ人の王様、パンザイ。」と言われていたわけです。からかわれて葦の棒で頭を何度も何度も打ち付けられました。頭の周りには細かい毛細血管が張り巡らされていますから、それが食い込めば当然大量出血です。それが 1 箇所です。2 箇所目は、両腕手首です。そして 3 箇所目は、両足首。それは傷痕で言えば、頭が 1 つ、両腕が合計 2 つですから 3 つ。そして両足で全部で 5 つです。そして脇腹が槍で刺されましたから 6 つです。もう 1 箇所^{いばら}の傷痕はどこにあるんですか。それは背中にあります。見えませんが背中ではフラグラムと呼ばれるあの鞭でボロボロにされています。7 箇所です。贖罪の日には大祭司が生贄の血を 7 度贖罪の蓋、そこに振りかけるわけですがけれども、イエスもまた 7 箇所^{いばら}の傷をもって、そしてその死を遂げられた時には垂れ幕が上から下まで真二つに裂けました。その 7 箇所、今イザヤ 59 章を開いたままであるならば、是非 3 節以降を見て欲しいと思います。イエスの頭には茨の冠がかぶせられました。茨というのはのろいの象徴であります。私たちの頭は、私たちの頭で考える事は、すべて呪われたものばかりです。罪深い発想ばかりです。3 節 4 節に『³ 実に、あなたがたの手は血で汚れ、指は咎で汚れ、あなたがたのくちびるは偽りを語り、舌は不正をつぶやく。』偽りを語り、舌は不正をつぶやく。頭の中で考えて、そしてそれで不正をつぶやく。4 節では『むなしいことにとより、うそを言い』とあります。そして 7 節のところには『彼らの足は悪に走り、罪のない者の血を流すのに速い。彼らの思いは不義の思い。破壊と破滅が彼らの大路にある。』と。“思い”です。同時にそこでは、3 節 6 節のところには“手”が出ています。手は血で汚れているとか、手の成すことは、ただ暴虐であると。私たちの手は、常に悪を成す手であります。足もそうです。7~9 節のところ足についても、『彼らの足は悪に走り、罪のない者の血を流すのに速い。』とあります。『彼らは平和の道を知らず、その道筋には公義がない。彼らは自分の通り道を曲げ、そこを歩む者はだれも、平和を知らない。』と。9 節にも『それゆえ、公義は私たちから遠ざかり、義は私たちに追いつかない。』

私たちは光を待ち望んだが、見よ、やみ。輝きを待ち望んだが、暗やみの中を歩む。』と。私たちが歩くところは暗闇であります。私たちの足は常に悪に走るものであります。そして脇腹の部分はちょうど心臓の部分です。心の部分ですが、13 節のところに『私たちは、そむいて、主を否み、私たちの神に従うことをやめ、しいたげと反逆を語り、心に偽りのことばを抱いて、つぶやいている。』同時にここには“そむいて”という言葉がありますから、それは背中をそむける、背中の部分です。12 節のところに“そむきの罪”と、13 節にも“そむき”とあります。イエスは私たちのために罪を負って、罪そのものとなりました。頭も、手も、足も、そして背中も、そして私たちの心臓(ハートの部分)もすべて悪で汚れきっております。そのすべてにイエスは罰を受けて、傷を受けて、そしてイエスの打ち傷が私たちを癒す、とありました。すべての罪を癒してくださるためにイエスは 7 箇所すべてに傷を受けてくださいました。

そして、また家に帰ってからイザヤ 59 章をずっと読み進めて頂きたいと思います。これは 16 節以降、急にトーンが変わります。『¹⁶ 主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を、ご自分のささえとされた。¹⁷ 主は義をよろいのように着、救いのかぶとを頭にかぶり、復讐の衣を身にまとい、ねたみを外套として身をおおわれた。¹⁸ 主は彼らのしうちに応じて報い、その仇には憤りを報い、その敵には報復をし、島々にも報復をする。¹⁹ そうして、西のほうでは、主の御名が、日の上るほうでは、主の栄光が恐れられる。主は激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまくっている。²⁰ 「しかし、シオンには(シオンというのはエルサレムの事でもあります)贖い主として来る。ヤコブの中の(これはイスラエルのことです。)そむきの罪を悔い改める者のところに来る。』——主の御告げ。——』イエス・キリストが 2000 年前にすべての人の罪を贖うために、すべての人を永遠の滅びから永遠の命に至らせるために救い主としてやって来ました。イエス・キリストは今も、その罪を認めて悔い改める者のところに来てくださいます。「私がいつも考えること、私がいつも手ですること、私がいつも足で向かうところ、私がいつも心に抱くこと、そして私がいつも背中ですむくこと。すべて自分ではもうどうにも出来ません。このままでは私は死ぬだけです。死んだらどこに行くのか分かりません。きっと天国には行けないと思います。天国に行きたいと思って心では願っています。だから人助けもします。だから献金もします。だから寄付もします。慈善活動にも、社会福祉にも関わります。ボランティアだって一生懸命やります。チャリティー活動も熱心に。」でも私たちは自分を救うことは出来ません。あなたは分かっていると思います。「自分にはそのような確信は無い。死んだらどうなるのか分からない。」でもイエスを信じる者は、そのすべての罪を贖われていますから、赦されていますから、死の向こうには永遠の命が待っていることを知っています。天国が約束されていることを知っています。ですから死ももはや恐怖ではありません。今日読んだテキストのところに、イエスの死の直後、死もまた滅ぼされた、ということが書いてあります。実際に『墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った。』と。イエスを信じる者には、永遠の命が約束されております。イエスを信じるその時点で天国行きの切符が頂けるわけです。もう行き先は確約されています。今日もし帰り道でも事故か何かで死ぬことになった時、あなたは恐れずに確信を持って「私は間違いなくイエス・キリストの待つ天国に入るんだ。何があっても私は恐れない、動じない。確信があるんです。天国に行く保証が自分には確かに与えられています。」と、胸を張って言えない人がいるならば、チャンスがあります。今日この瞬間にでもあなたはイエスを自分の救い主として信じることができます。難しいことではありません。ただ聖書に書かれている通りイエスは実在の人物として、この十字架刑も史実としてすべてあなたのために成されたことで、それは古^{いにしへ}の預言者たちが預言した通り、人間には絶対にできないことを人となられた神が、イエス・キリストが代わりにして下さったこと、これはイエス以外にはとても出来ない業です。あなたにも出来ませんし、他の所謂宗教家、聖人たちにも出来ません。ムハンマドにも出来ません。マホメットにも出来ませんし、孔子にも出来ませんし、またお釈迦さんにも出来ません。ゴードマ・シッダルダも結局は死んで葬られて、骨があるだけです。世界中に仏舎利塔がありますが、それを集めれば何十トン、何百トンにもなるそうですけれども。イエスは死んで終わりませんでした。よみがえられたんです。死からよみがえった方は唯おひとりだけです。そのイエス・キリストを自分の救い主として今信じるならば、あなたはこの瞬間に永遠の命を頂きます。無条件です。条件などついていません。そしてあなたは神とアクセスを持つことが出来ます。いつでも神と繋がれるんです。まるで携帯電話みたいなもので

す。スマートフォンみたいなものです。いつでも神様と繋がれるんです。すべてあなたの必要なものは、神から来ます。スマートフォンからではありません。神から来るんです。もうあなたは孤独ではありません。もうあなたは思い煩う必要もありません。死に対して恐怖することはありません。イエスを信じたその瞬間にすべてのこれまでの恐れも、空しさも、悩みも、何もかもが解消され、何もかもが解決し、そしてあなたにはこれまで味わったことのない平安がやってきます。是非この平安を、もし今持っていないならば、イエスを信じることによって持って、これが天国行の確信であるとも表現出来ると思います。平安があるんです。あなたには平安があるでしょうか。神とあなたは繋がっている。それとも神はあなたに背を向けて、あなたは神と敵対しているでしょうか。イエスを信じることによって、神とは和解できます。仕切りがなくなるんです。自由に神と交わられます。その結果、あなたには平安がやって来ます。それが救いの保証ともなります。確信ともなります。それが無い方は是非、何度もしつこいように言いますが、今日が最期かもしれない。そのことを私は皆さんにチャレンジしていますけれども、明日があるかどうか何の保証もないわけですから、敢えて強調しているわけです。皆さんのことを思って、皆さんのためにです。いつ死んでも良いような人生こそ、最高の人生だと思いませんか。まだ老後があると思ったら大間違いです。ある日急に大津波が襲ってくるかもしれません。急にすべてを失うこともあるかもしれません。急に「もう手遅れです。余命あと何ヶ月です。」なんて言われることもあるかもしれません。急に車の事故ではかなく空しく命を散らせることもあるかもしれません。ですから死活問題として皆さんにこのことを伝えておきます。地上の命がすべてではありません。死んだ後の命こそが本物の価値のある命でありますので、それを今手に出来る事は幸いなことです。最後にお祈りして、もし祈りの中で「私もその命を欲しい。イエスを信じることで、ただで、無条件で、そんな救いが得られるのであれば、是非そうしたい。」という方は、私の祈る祈りを自分の祈りとして共に祈って欲しいと思います。「今はよく分かりません。」という人もいるかもしれませんが、後回しにしない方が良くと思います。というのは、明日があるかどうかは何の保証もないからです。でもイエスを信じるならば、明日がたとえなくても決してなくなる命が与えられる保証を頂けますから、もう安心です。待たないでと私は考えていますので、是非これがただで頂けるならば。勿論ただと言っても、これには神の命がかかっているということ。命の代償、これは計り知れないということ。ただほど高いものはない、と言いますが、その通りです。でも私たちは払えませんから、神が代わりに命をもって払ったと。その尊い救いを是非受け取って欲しいと思います。では、お祈りいたします。